



卓 話

同じようなものでも片方は世界遺産になっていて、もう片方はなっていないということも多い。ナイアガラ滝、大英博物館、バッキンガム宮殿・・・これらの超有名な観光地は、当然世界遺産のように思われるが、どれもそうではない。一方、イグアスの滝（ブラジル・アルゼンチン）、ルーブル美術館、ヴェルサイユ宮殿などは、世界遺産に登録されている。

私は、主にプライベートの旅行で、これまでに50カ国200件ほどの世界遺産を自分の足で歩いてきた。特に、日本ではほとんど無名の遺産に興味を魅かれ、そうした物件を中心に回ってきた。それは一見地味な旅に見えるが、実はその国の本質が浮かび上がる旅となることが多い。

今年の夏には、1週間レンタカーを借りて、中欧ハンガリーの8件の世界遺産と9件の世界遺産暫定リスト物件を巡って来た。ハンガリーを訪れる日本人のほぼ100%が首都ブダペストを訪れる。「ドナウの真珠」と形容され、王宮や国会議事堂など壮麗な建築物がドナウに沿って展開する町並みの美しさは、世界でも第一級で、この町並みも世界遺産に登録されている。しかし、ブダペストを見ただけでは、19世紀にハプスブルク家によって繁栄したというハンガリーの一面しか見えてこない。ハンガリーを訪れる日本人観光客のほぼ9割がブダペストだけを見て、そくさとウィーンやプラハへと移動してしまうが、ハンガリーの真髄は、ブダペストから離れた世界遺産にある。たとえば、ハンガリー大平原の真っ只中にある「ホルトバージ国立公園」。ここでは、遊牧民が馬を操り牛や羊を飼う昔ながらの生活が残されている。実は、ハンガリーはウラル山脈付近から移動してきた騎馬民族が建てた国で、アジア系。名前も日本人同様、姓が先に書く。日本人と同じ言語系統を持つ「ウラル＝アルタイ語族」なのだ。ホルトバージ国立公園では、馬車に乗ってそうした伝統的な遊牧民の暮らしを間近に見ることができるが、ヨーロッパにいることを忘れ、モンゴルの大草原にきたような気分になる。ここへ来て初めてハンガリーの歴史や成り立ちが見えてくるのだ。

同様に、オランダも、ありきたりのアムステルダム観光やレンブラントやゴッホの絵を見る美術館め

「知られざる世界遺産について」

NHK前橋チーフプロデューサー

佐滝 剛弘氏

ユネスコの世界遺産。最近いろんなところでよくこの名前を聞かすが、皆さんも関心がおありだろうか？今年6月には、島根県の石見銀山とその周辺が日本で



14番目の世界遺産に登録された。一時は登録延期といわれたものの、国や地元の巻き返して逆転登録にこぎつけたという話は、ニュースでも記憶に新しいところだ。今年、ほかにも、韓国の済州島や、シドニーのオペラハウスが新たに世界遺産に登録されたこと、また、日本では、群馬県の富岡製糸場や、長崎県のキリスト教の教会群などが、世界遺産の予備軍ともいえる「暫定リスト」に登録されたことなどもニュースで何度も取り上げられた。

さて、この世界遺産、いったい世界でどれだけあるのか？誰が決めているのか？そしてどこまで増えるのか？また、万里の長城やエジプトのピラミッドなどの世界的に有名な遺跡だけでなく、石見銀山のような、日本人でさえ、これまでほとんど知らなかったような地味なものがどうして世界遺産になれるのか？シドニーのオペラハウスのようなつい最近できた現代建築（1972年の完成）でも、世界遺産になれるのか？疑問は尽きないと思う。

きょうは短い時間ではあるが、世界遺産の不思議にお付き合いいただきたい。

世界遺産の物件が初めて登録されたのは、1978年、今から29年前とそれほど古いことではない。最初は、世界全体でたった12件だった。それから毎年のように増え、今では全世界で851件。もはや全部を暗記できる人はいないのではないかと思えるほどの増加ぶりである。サウジアラビアやミャンマーのように、日本より面積が広いのに、一つも世界遺産がない国もあれば、イタリアやスペインのように一國で40を超える国もある。最近急速に増えているのは中国。いまや35を数え、世界で3番目に多い。また、

ぐりだけでは国の本質が見えてこない。オランダには、干拓地や蒸気による水の排水場など、世界遺産としてはきわめて地味なものが多いが、それらを訪ねると、オランダという国が、国土の四分の一が海面下にあり、水との戦いに明け暮れてきたことが実感として伝わってくる。世界遺産とは、それぞれの民俗や国家が、どれだけ多様性を持ち、それを大切にしてきたかのバロメーターでもあるのだ。

日本でも、京都や奈良、日光など政治や宗教の強大な権力を象徴する世界遺産以外にも、人々の日々の営みと生活の知恵を表す世界遺産がいくつもある。「白川郷と五箇山の合掌造り集落」もそのひとつである

し、私が住んでいる群馬県で現在、登録推進運動が進められている「富岡製糸場と絹産業遺産群」も、養蚕農家や織物など、江戸時代以前から続く農村の生活と密接不可分な文化を象徴としたもので、こうした遺産が脚光を浴びることは、日本人のアイデンティティを見つめなおすことにつながってくる。

世界遺産はこれからも旅へといざなう重要なキーワードであり続けるだろうが、知名度や見た目の派手さではなく、そこに流れる文化の多様性をどう感じ取れるのか、見る者の価値観を試すような「ホンモノ」の遺産を見る「われわれの眼」も問われている。